

2025 年クラス会近況報告 Violin・散歩・読書

山口光恒

ここ数年小生の近況は上記 3 点につきる。遅い朝食後 12 時半までは防音室に籠もって個人レッスンに向けての Violin の練習、昼食後テレビで録画した「クラシッククラブ」をみて、夏の間はさらに 1 時間半程度オーケストラ用の練習、午後 4 時頃から 3 時間程度散歩、帰宅後シャワーを済ませて 7 時半から夕食、9 時には書斎に引き上げて読書、この繰り返しである。この間に交詢社の午餐会や研究会、そしてオーケストラの練習にも出かけるので、1 日が 24 時間では足りない。

先ず Violin であるが、月 1 回の個人レッスン用のエチュード（教則本）としてスケール（音階）からボーイング（弓使い）、重音練習など 5 冊、それにここ暫くはモーツァルトのソナタを重点的に練習している。

散歩は毎日 13000 歩を目指して歩き回る。これは旅行中でも同様で、実際今年 8 月末までの 1 日あたりの平均歩数は 13000 歩をなんとか上回っている。距離にして 7km 程度、京浜東北線だと二駅分は確実に歩いている。途中家内と会って買い物をし、それらをリュックに詰めて歩くので結構重い。夕食後はもっぱら読書だ。今回はこの点に重点を置く。

最近以前から読みたいと思いつつつい読みそびれていた本を数冊読んだ。スイフトの「ガリバー旅行記」、ブロンテ姉妹の「嵐が丘」と「ジェーンエア」だ。いずれも大層面白かったがとりわけガリバー旅行記は子供の頃絵本で読んだものと大違いで本当に驚いた。因みに漱石も文学論でこの本を詳細に論じている。未読の人は是非読んでほしい。

このほかちょっと毛色が変わったものに、アダム・スミス「道徳感情論」がある。これは慶應義塾読書会の主催で、慶応経済学部の名誉教授で若い頃ヒュームの研究で学士院賞を受賞した坂本達哉氏を講師に迎え、各人がこの膨大な図書を読み込んだ上で、7 月の土曜日にそれぞれ 3 時間ずつ 2 回に分けて講師の解説を拝聴したもので、小生流石に最近持続力が無くなってはいるが、なんとか読み通してから出席した。講義は期待に違わぬもので、まさに本物の教授から極めて幅の広い観点からこの本を解説いただいた感があり、久しぶりで大学の良質な講義に出席したような興奮を覚えた。

もう一冊は 8 月に出版されたばかりの門田隆将著「大統領に告ぐ 硫黄島からルーズベルトに与ふる書」で、これは昭和 20 年 3 月 27 日に硫黄島で玉砕した

海軍司令官市丸海軍少将が玉砕を前に、敵将ルーズベルトに与えた書を中心としたノンフィクションで、この手紙の日本語と英語版（部下の日系二世による英訳）がアメリカ・アナポリスの海軍兵学校に現存している。手紙の内容は日本がやむなく開戦に至った理由（大東亜共栄圏建設によるアングロサクソンによる東洋人奴隷化からの解放）、なぜドイツでナチスが勢力を増し戦争に走ったのか（第1次大戦の結果ドイツに過重の責めを負わせた）、またナチスを倒しても共産主義国であるソ連と協調しようというのはどういうことか等であり、一読して市丸少将の国際情勢と歴史認識の的確さに驚かされる。

さらに驚くのは、この手紙（和英両分）がアメリカ有力紙の記者によって4月4日に本社に打電され、3ヶ月の差し止めを経てヘラルドトリビューン紙に大々的に取り上げられていたことである。しかしルーズベルト大統領は4月12日に死去しており、おそらく本人には届けられなかったと著者は推測している。著者門田隆将はさらに戦後のアメリカでの研究にもおよび、フーバー元大統領の著書を基にハルノートの理不尽さを明らかにし、市丸少将の歴史認識の正当性を主張しているが、詳細は是非本書に当たってほしい。

そろそろ字数もつきた。石破首相の退陣が決まり、これから日本は混迷の時代に突入する。孫の時代の世界と日本の行く末が心配だ。2025年9月12日